

## ジャポニスム 世界を魅了した浮世絵

千葉市美術館 2022. 01. 12～03. 06



19世紀後半から20世紀にかけて、大量に海外に渡った日本の美術工芸品は、西洋の美意識に大きな影響を与えて「ジャポニスム」（日本の影響を受けて作られたヨーロッパの芸術作品）のムーブメントとして広がっていった。

なかでも「浮世絵版画」は、多くの西洋画家たちに直接影響を与えたことが知られ、西洋の芸術家たちが「浮世絵」に出合った時、“何を新しいと感じ、感動し、自らの芸術に取り入れようとしたのであろうか。”

本展は、「ジャポニスム」の画家たちの作品が、「浮世絵」から取り入れた視点をきっかけに、“その特性と魅力を再発見しようとするもの”である。

展示作品は、「浮世絵」の名品を中心に、欧米、ロシアから「ジャポニスム」の作品を加えた「約220点」の作品を展示するユニークな催事である。



葛飾北斎 《富岳三十六景 神奈川沖浪裏》 1831～33年(天保2～4年)頃

東京湾上から見た景色を描いた北斎の代表作で、波間に見えるのは房総や伊豆から江戸へ鮮魚を運ぶ押送船（おしおくりぶね）で、大浪に翻弄されているかのようであり、大波に対峙するのは端正な姿の「富士山」で、“静と動の対比で雄大な景色”を表現している。

鈴木春信 《夜の梅》 中判錦絵 1766(明和3)年頃

暗闇の中に浮かび上がる白梅と妖精のような娘の姿の対比の美しさから、数ある春信の中でも名品と挙げられる。ロマンティックな詩情に溢れ、闇の中、手燭を掲げて白梅を見返る可憐な娘は何を思うのだろうか。

歌川広重 《名所江戸百景 深川洲崎十万坪》 1857(安政4)年

海岸から鳥瞰という大胆な構図により、広大な湿地帯の荒涼とした冬の雪景色を描いた作品は、深々と雪が舞う浜辺に静けさが漂い、翼を広げた鷺が上空から獲物を狙う様子は、躍動感に溢れて静と動の対比が大きな魅力である。